

赤 と 青

——「もどき」をともなう王の舞——

橋 本 裕 之

-
- | | |
|------------------|----------------|
| 1. はじめに | 3. 赤い王の舞、青い王の舞 |
| 2. 「もどき」をともなう王の舞 | 4. おわりに |
-

論 文 要 旨

王の舞は平安末期から鎌倉期にかけて、おもに中央の大社寺でおこなわれていた祭礼で田楽・獅子舞等にさきだって演じられていた。現在でも16ヶ所で伝承されている若狭地方をはじめ、ひろい地域に分布している。王の舞は一般に赤い鼻高面と鳥甲をかぶり裃袴装束を着用して、前段は鈴を持ち後段は素手で四方を鎮めるように舞う。舞楽にみられる剣印を含み、太鼓や笛などで囃すというものである。本稿は王の舞にまつわる各論の第一歩を踏み出すべく、「もどき」をともなう王の舞をとりあげてみたい。

「もどき」をともなう王の舞が少数ながら存在している。そもそも王の舞は1人で演じるものであったから、きわめて特異な存在形態であると考えられる。しかも、こうした事例は「もどき」をともなう王の舞が赤と青の対比を構成していた可能性を感じさせる。すなわち、青を強調する存在が赤を強調する存在に対して、「もどき」を演じていたらしいのである。

一方、王の舞が変化したものと思われる事例も、多く赤と青の対比を構成していた。各地に伝播した王の舞が青を強調する存在を派生させて、赤と青の対比を構成する一対の存在に転化していったのだろうか。青を強調する存在は必ずしも「もどき」をしのばせる所作や扮装をともなっていないが、やはり派生した存在である。広義の「もどき」に含めてしまってもいいのかもしれない。

かくも特異な存在形態は舞楽における番舞をしのばせる。とりわけ散手・貴徳は王の舞の源流であったかと思わせるぐらいよく似ている。舞楽にみられる赤と緑色（青）の対比が後世の王の舞にも波及していた、その可能性はきわめて大きいはずである。いずれにしても、青い王の舞が赤い王の舞に対する広義の「もどき」であったことは、観客の演劇的想像力を触発するべく導き出された演出の形式であった。そう考えておきたい。